

今年の夏の天候の経過と この冬の天候の見通しについて

福岡管区气象台 気象防災部
気候変動・海洋情報調整官
篠崎 覚

本日の内容

- 今年の夏の天候の経過

 - 梅雨の経過

 - 夏の高温

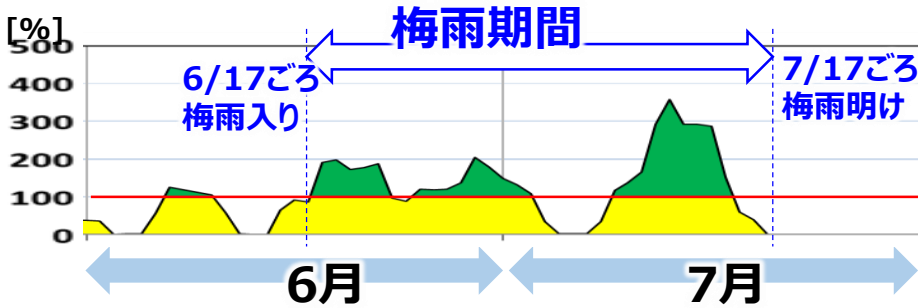
 - 台風

- この冬の天候の見通し（寒候期予報等）

- 「日本の気候変動2025」の紹介

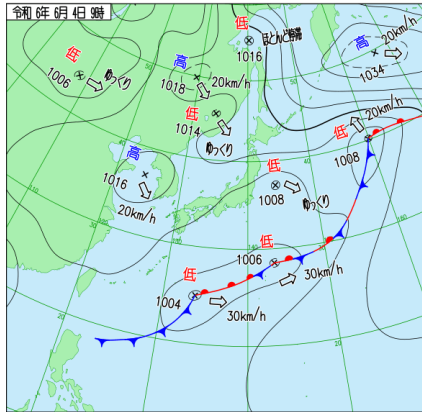
梅雨の経過

九州北部地方の降水量平年比[%] (5日移動平均値)

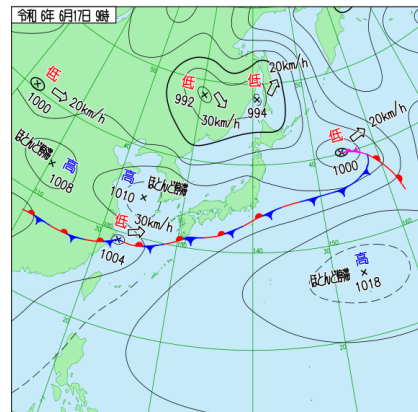


梅雨入りは平年より遅い6/17ごろ
 梅雨明けは平年並の7/17ごろ
 → 今年の梅雨は例年より短かった
 降水量の平年比107% → 平年並

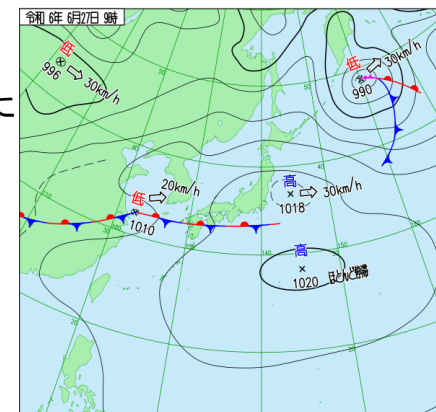
6/4
 梅雨入り
 平年日



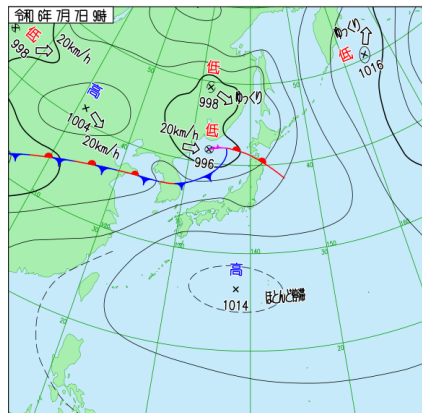
6/17ごろ
 梅雨入り



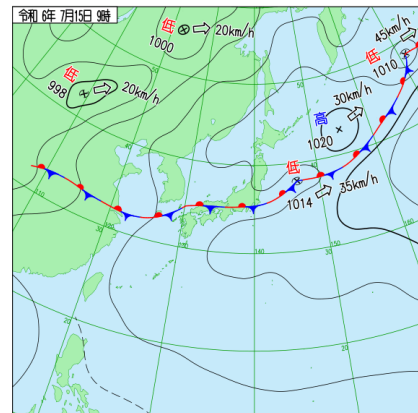
6月下旬
 梅雨前線
 九州付近に
 停滞



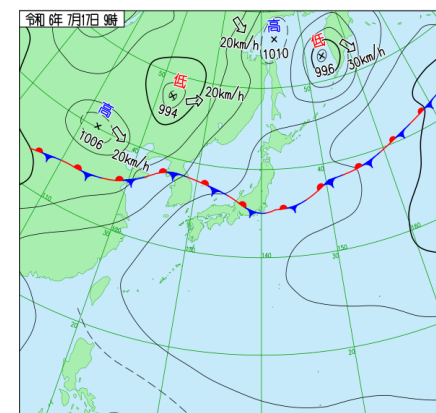
7月上旬
 梅雨前線
 北上



7月中旬
 梅雨前線
 再び
 九州付近に
 停滞



7/17ごろ
 梅雨明け

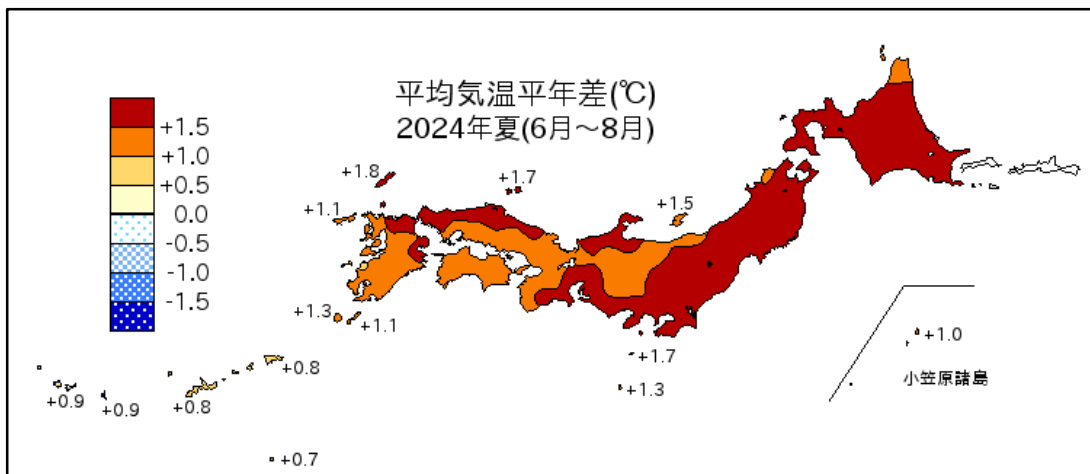


太平洋高気圧
 の張り出し
 高温

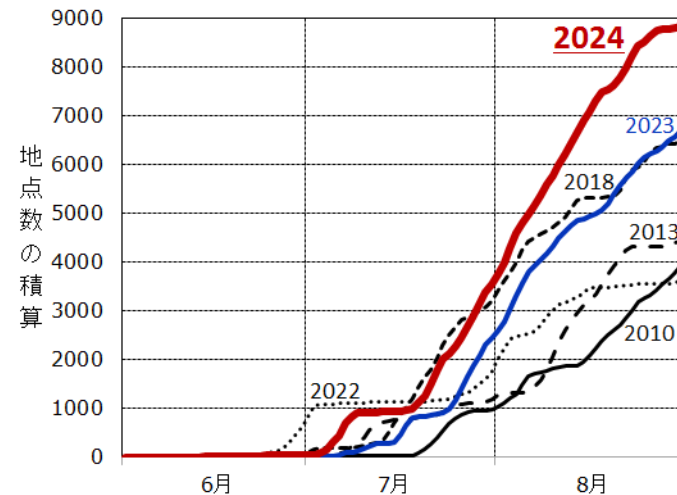
今年の夏 (6月~8月) の高温

- 全国的に気温はかなり高かった
- 日本の夏の平均気温は 1898 年以降で**最も高かった** (1位タイ)

2024年夏の平均気温平年差の分布



2024年夏の猛暑日地点数の積算



夏平均気温

	平年差	階級	順位
北日本	+2.3	かなり高い	2位
東日本	+1.7	かなり高い	1位タイ
西日本	+1.4	かなり高い	1位
沖縄・奄美	+0.9	かなり高い	1位

夏を通じて全国的に暖かい空気に覆われやすく、7~8月は西日本を中心に太平洋高気圧に覆われやすかったため晴れて日射が強かった影響もあり、夏の平均気温は全国的にかなり高かった。夏の平均気温平年差は東日本で+1.7°C、西日本で+1.4°C、沖縄・奄美で+0.9°Cとなり、1946年の統計開始以降、夏として西日本と沖縄・奄美で1位、東日本で1位タイの高温となった。

今年の夏 (6月~8月) の高温

今年の夏は暑かった。各地で猛暑日を観測。
八幡、久留米、太宰府等では**歴代1位の最高気温**を観測。

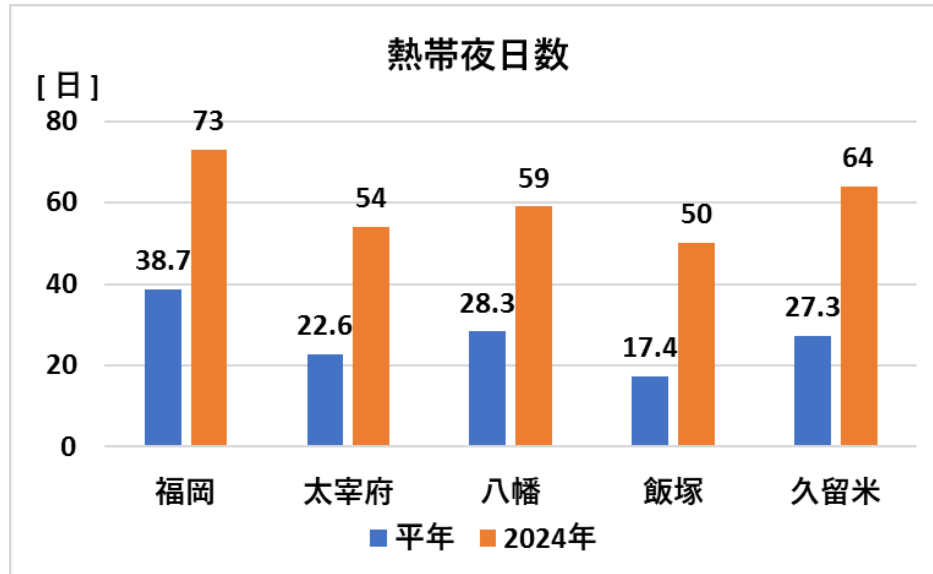
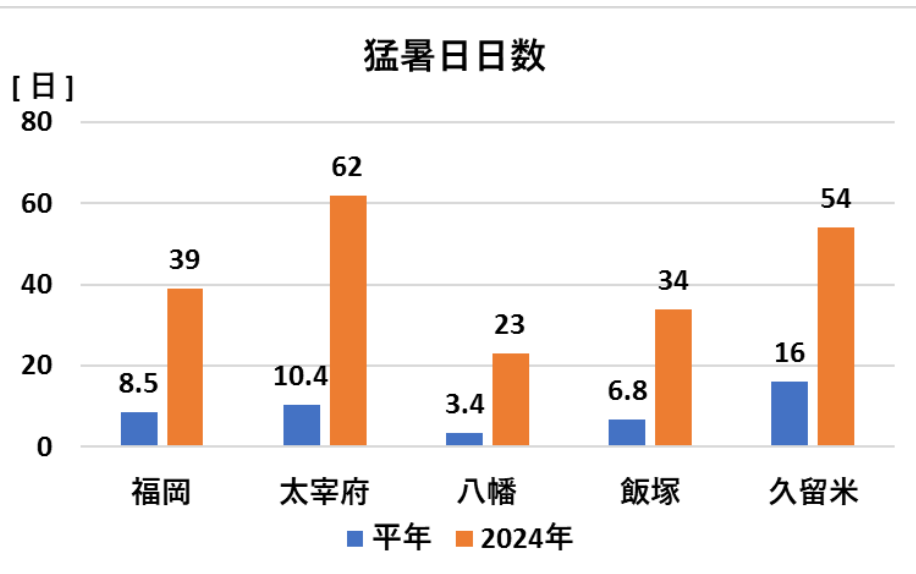
福岡県各地の2024年夏(6月~8月)の最高気温(°C)

地点	最高気温		これまでの最高		開始年
福岡	37.8 (歴代6位)	8月21日	38.3	2018年7月20日	1890年
八幡	37.6 (歴代1位)	8月20日	36.9	1994年7月16日	1977年
飯塚	37.8 (歴代2位)	8月2日	38.3	2020年8月20日	1935年
久留米	39.5 (歴代1位タイ)	8月5日	39.5	2018年8月13日	1977年
太宰府	39.3 (歴代1位)	8月2日	38.6	2023年8月3日	1977年

今年の夏（6月～8月）の高温

今年の夏は暑かった。猛暑日は平年の3倍以上、
熱帯夜も平年の1.5倍～2倍

2024年（6月～9月）の猛暑日と熱帯夜の日数



※太宰府では、62日の猛暑日を観測し、日本記録を更新(10月23日現在)。

今年の夏 (6月~8月) の高温の要因

上層：日本付近で亜熱帯ジェット気流が北に蛇行

下層：太平洋高気圧の西日本への張り出しが強い

ヨーロッパからの
ジェット気流蛇行の伝わり

インド洋北部の対流活動が活発



日本付近は暖気を伴った背の高い高気圧に覆われた

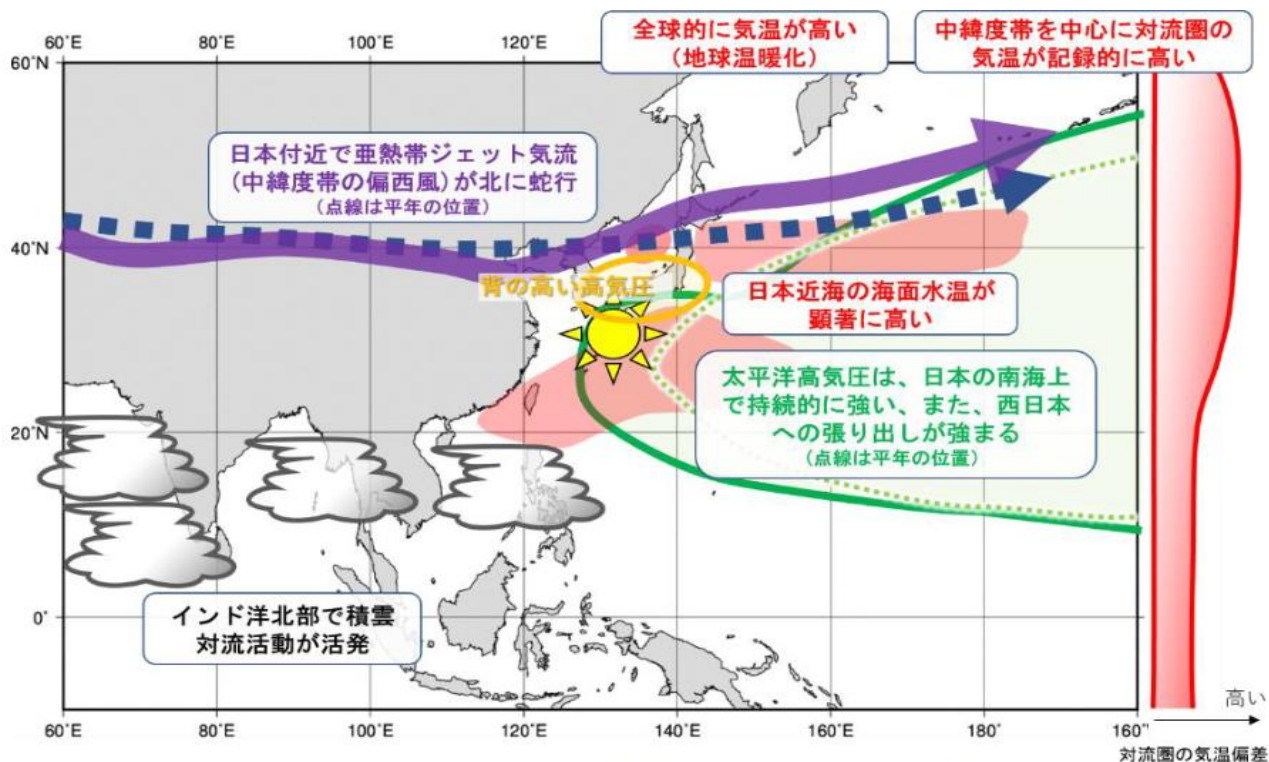
—その他の要因—

！地球温暖化等の影響で
全球的に気温が高い

！日本近海の海面水温が
顕著に高い

令和6年気象庁報道発表資料「令和6年7
月以降の顕著な高温と7月下旬の北日本の
大雨の特徴と要因について」より

<https://www.jma.go.jp/jma/press/2409/02a/kentoukai20240902.html>



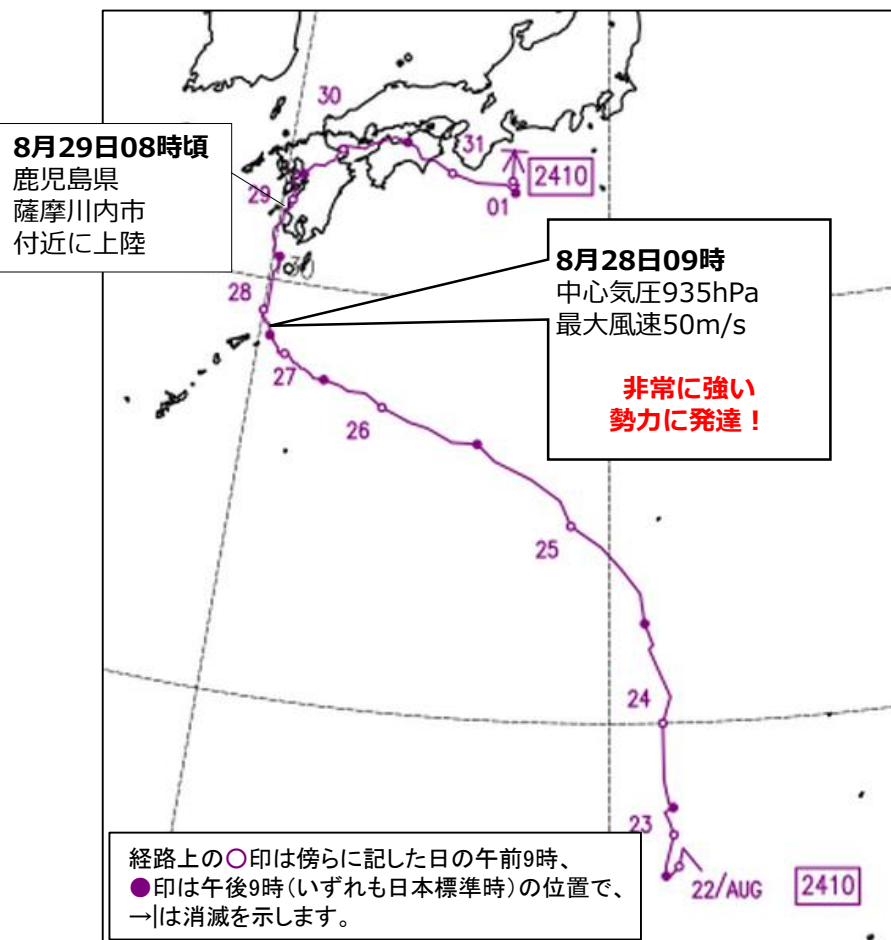
7月の顕著な高温をもたらした大規模な大気の流れに関する模式図

令和6年の台風について

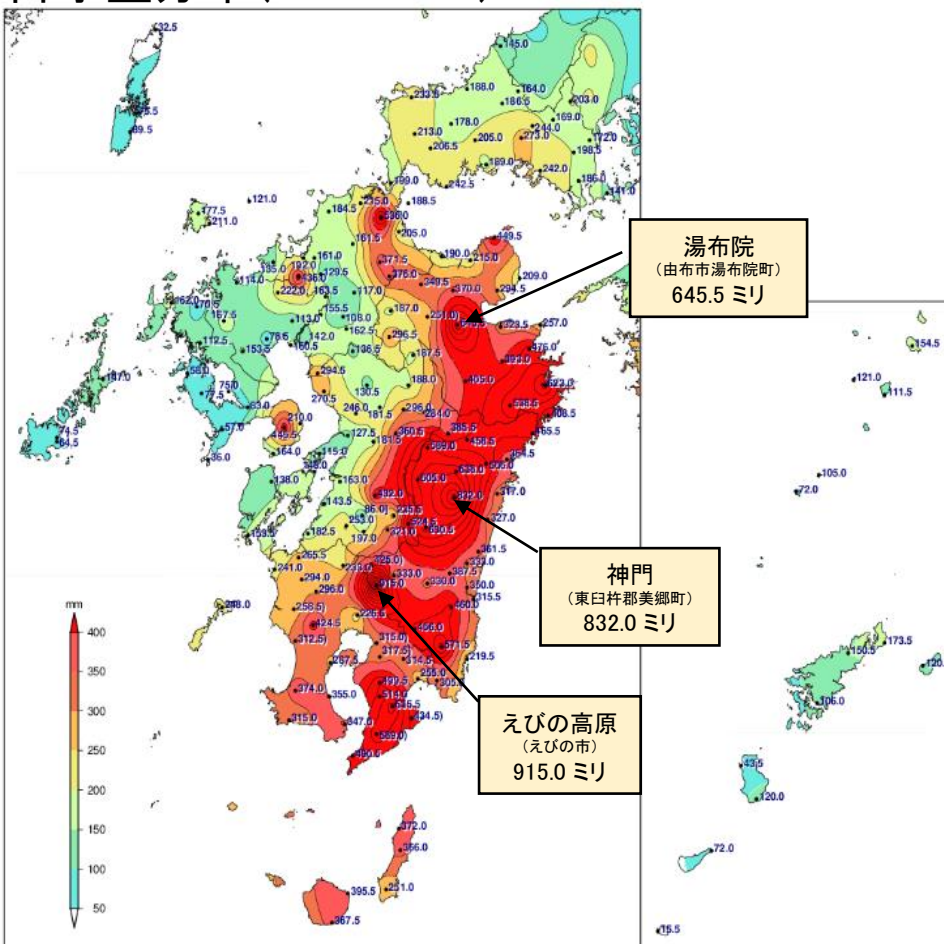
令和6年の台風の発生数
(11月5日時点)

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
2024					2		2	6	8	3	1		22

令和6年台風第10号の経路



降水量分布(8/26-8/31)



この冬（12月～2月）の天候の見通し（寒候期予報）

- ・ 冬の気温は、ほぼ平年並みの見込み。
- ・ 冬の降水量は、低気圧の影響を受けにくい時期があるため、平年並みか少ないでしょう。

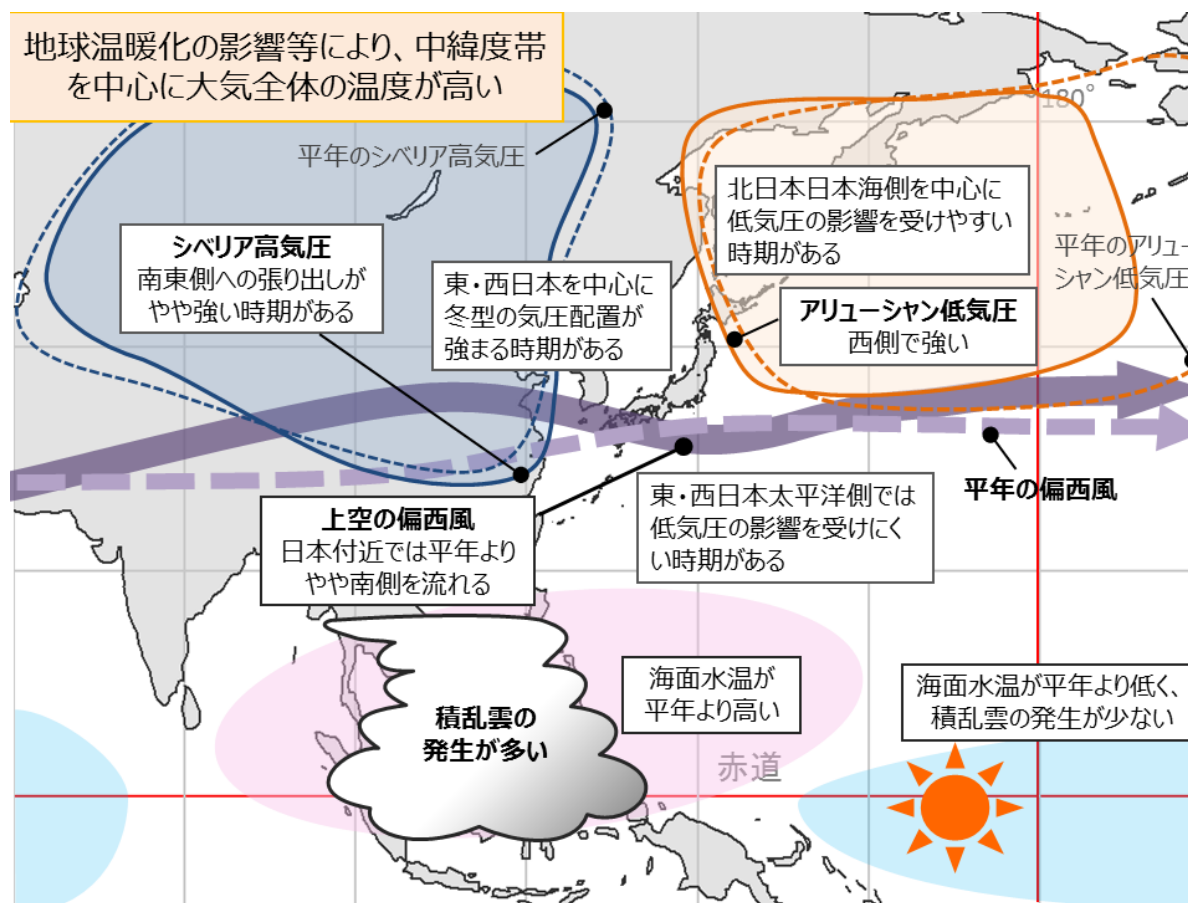
冬（12月～02月）の平均気温・降水量

	平均気温 冬（12月～02月）	降水量 冬（12月～02月）
九州北部地方（山口県含む）	低 40 並 30 高 30% ほぼ平年並 の見込み	少 40 並 40 多 20% 平年並か少ない 見込み
数値は予想される出現確率（%）です	<p>平均気温 冬（12～2月）</p> <p>低い確率（%） 50以上 40 40 50 高い確率（%）</p> <p>平年並も40以上</p>	<p>降水量 冬（12～2月）</p> <p>少ない確率（%） 50以上 40 40 50 多い確率（%）</p> <p>平年並も40以上</p>

この冬（12月～2月）の天候の見通し（寒候期予報）

予想される海洋と大気の特徴

- ・ ラニーニャ現象が発生する可能性が高い。
- ・ 偏西風が日本付近でやや南に蛇行。冬型の気圧配置が強まる時期がある見込み。



「日本の気候変動2025」について

日本における気候変動に関して観測結果と将来予測を取りまとめた資料

- ・日本の気候変動2025」を2025年3月頃に発行予定
- ・「日本の気候変動2025」に基づいた、都道府県別リーフレットも作成中。

XX県の気候変動

「日本の気候変動2025」(文部科学省・気象庁)
に基づく地域別のリーフレット

気温の上昇



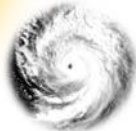
大雨の増加



海面水温の上昇



台風強度の増大



このリーフレットでは、これまでの気候の変化と将来予測に関する情報をまとめています。将来予測の方法等の詳細は、裏面を参照ください。

リーフレット中の各アイコンは、情報の空間スケールを示します。

- ある地点における情報です
- 地方スケールの情報です
- 都道府県スケールの情報です
- 全国スケールの情報です

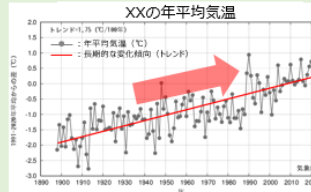


XX地方の気候の変化については、こちらからもご覧いただけます → 気象庁HP「日本の各地域における気候の変化」

令和X年X月
XX地方気象台・XX管区気象台

気温の上昇

これまでの変化



100年あたり
XX℃上昇*

※右のグラフのデータから算出した100年当たりの平均的な上昇率です。

最新の気候傾向は、本県及びこれまでの気候・海水温の変化(気象庁提供グラフ掲載)をご覧ください。

21世紀末の予測

熱中症等のリスク増加

XX県の年平均気温は、20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオで約XX℃、4℃上昇シナリオで約XX℃上昇

年間猛暑日数 XX日 → 約XX日 / 約XX日
(+約XX日) (+約XX日)
年間熱帯夜数 XX日 → 約XX日 / 約XX日
(+約XX日) (+約XX日)

一見小さく見えますが、実際は大きな変動です

左から、20世紀末の観測値、21世紀末(2℃/4℃上昇シナリオ)の予測値

猛暑日は、日最高気温が35℃以上、熱帯夜は日最低気温が25℃以上の日です。

海面水温の上昇

21世紀末の予測

XXの年平均海面水温は、20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオでは約XX℃、
4℃上昇シナリオでは約XX℃上昇

XXが出す海況は、気象庁HP「海面水温の長期変化傾向(日本近海)」を参照ください。

台風強度の増大

将来予測

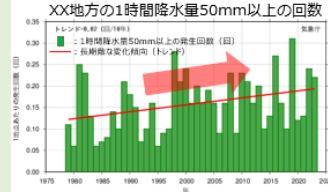
日本付近の台風強度は強まる
とともに、台風に伴う降水も増加



※1 濃霧に伴う台風の発生を解析した様々な研究結果に基づきます。
※2 中心付近の気圧または風の強さ

大雨の増加

これまでの変化



増加しています

甚大な被害をもたらした「平成30年7月豪雨」には、地球温暖化に伴う水蒸気量の増加も影響したと評価されています。

最新の気候傾向は、本県及びこれまでの気候・海水温の変化(気象庁提供グラフ掲載)をご覧ください。

21世紀末の予測

傘が全く役に立たなくなるような降り方です

XX地方の1時間降水量50mm以上の年間発生回数は、20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオでは約XX倍、4℃上昇シナリオでは約XX倍に増加

土砂災害や洪水等の災害リスク増加

各シナリオにおけるおおよその年代
2℃上昇シナリオ
(SSP1-2.6)
4℃上昇シナリオ
(SSP5-8.5)

温暖化の程度に応じた予測

20世紀末には100年に一回しか起こらなかった大雨がより頻繁に

XX地方の予測	20世紀末	2023-2042年頃 ※1	2023-2061年頃 ※2	2076-2094年頃
温暖化の程度		1.5℃上昇	2℃上昇	4℃上昇
100年当たりの発生頻度	1回	約XX回	約XX回	約XX回

現在、100年に一回の日降水量は、XXでは約XXmmです。温暖化が進むと、こうした大雨がより頻繁に発生します。

※1 ここでは日降水量に基づき結果を示します。
※2 2031-2050年頃に2℃上昇となる可能性はあります。

より詳しい情報は、気象庁HP「極端現象発生頻度情報」をご覧ください。



- 梅雨は、平年より短かったが、降水量は平年並。
- 夏は、背の高い高気圧に覆われて記録的な高温。
太宰府でも猛暑日日数が62日と日本記録を更新。
- 熱中症への対策がより一層重要。
- この冬は、平年と同様に曇りで雨や雪の日が多く、
平年並の寒さとなる予報。

* 気象庁では観測データ、要因分析、今後の見通しなど
様々な情報を公開しています。是非ご利用ください。

